

仇訖七部集

卷みの

三





晉其角序

能謂乃集つる事古今り
 わらりそけ道れおまへ起西
 き時たれや幻術の事一也
 しそろれ白り魂そ入さ道
 えゆえよ格あさるに似さ
 西一久一一世よそまらり
 長く人ようりて不取及れ家

を志し〜じ五徳ハツヤノ及ん
ほんをさ〜ほ通さるぬ〜た
こたり彼あり上人代骨り
てんを作〜〜〜詳い〜純
多〜留を吹やうになん結る
とり〜純を人よ成て結さ
如〜五の詳の〜純を家は
及魂乃法代をろろ〜のよ信ふ

屋は造〜したまり〜る代入を
しアイウエヲ〜くひ〜ま〜
い〜〜吟詳〜をあぬ通
〜只謝詣も魂代入〜詳
〜ところ〜我翁行脚乃〜
伊加言越〜〜山申〜
積〜小養を看〜詳
乃神を入〜〜今純をた

ちまたに新賜のむすしを呼
ひてあはれあはれに懼る人まは
御ちりこをえとては
集をつくもよとて様そのよ
付たりあはれあはれは
れんをよとて魂を合せよと
え兆乃ほ一とてあはれよと
書

猿蓑集卷之一

冬

初〜猿蓑を小蓑をほい也 芭蕉
あはれあはれをほいよとて夜は
時あはれあはれよとて
幾人〜猿蓑をほい也 僧 丈州
徳持の猿蓑をほい也 膳所 正秀
猿蓑をほい也 史邦

大蔵

舟人のあはれきこえし可なり 尚白

伊賀の境より

や素良の隣乃一時 曾良

や早本ついで空あり 凡兆

竹田の里やけし我 乙羽

早あえや小夜可ぬ 羽紅

新田は穉穀焼く 昌房

や沖の河ぬれ帆片帆 去来

もつねよけや北平れ早あふ 百歳

伊賀

いづの動く地なきおねぬれ 野水

後

しるしにほむね船の中 其角

歸るはるはる志ん返切し 同

禅もれ雲のさるや神守月 凡兆

百舌もあふおちれ松よ十月 嵐蘭

かしくや頬腫痛む人の影 芭蕉

みよけを延ばれしをよまを 凡兆

たの〜として

掉^{ヲビカ}麻のこころみちの枯ゆれ 伊賀 土七方

流梯をたふして過したる外 膳所 裾道

ちやの〜ぬやい〜人〜 伊賀 越人

よのむほ茶のふゆよおきり 伊賀 猿錐

古ちれ貫子もあ〜り〜 伊賀 凡兆

玉羽の雲田よ軍持をゆ〜

雑水のおとろが〜ハ冬こもり 其角

こ乃〜きと牡丹の〜ぬまの裸 伊賀 車来

草津

あ日さるひ〜い〜の〜 尚白

神逆水の〜ら〜ら〜 珠碩

霜月朔旦

掃まららふよ物あ〜 伊賀 良品

水月れあを〜 羽后田 不玉

今ハ世をさるものしきもや冬の時 尾張 貝菓

尾取のころのあまき海風 去来

一色くさむき湯や釣干菜 伊賀 探丸

しらしらに多賀井のま 尚白

茶臼のころのきりも 江戸 龜翁

炭竈より負れ枝の倒き 九兆

住つぬ娘のころや 芭蕉

寝ころや火燵蒲團の 其角

内尾張 此小の形もあうぬ冬を 九兆

よ兔や 尾張 ちの 苺境

〜〜ハ眠るや 伊賀 半残

貧交

ま〜らるる 大州

浦風や 曾良

あ〜儀や 去来

狼のあ〜踏付 史邦

背門は乃入のほるふるもれ 丈艸
いりせり雪よまきて鳴千鳥 千那
矢田のゆも浦のあらね鳴ふる 元北
筏たれんふる跡や駕の舟 本節
水底をくんで魚の小鴨哉 文州
るるも寝をくめる余吾の馬 路通
死んで探成ん鷹はるか 具蒙
襟まきり首引く冬れ月 秋風

あわ戸や鎖のまけて冬れ月 其角
かゝちりれ蒲團をくめりや冬の寝 長崎 暮年
見やるとん旅人ふり 石部山 大津尼 智月
翁の御れあきまの衾をまき 義濃
らるる記あり略々 竹戸

題竹戸之衾

五とめハ我のまけあきま紙衾 曾良
魚のけ標乃やまてかきと秋水 探丸

志のこゝに散珠のたのす網代書 史邦

清白砂は候す

膝つこゝのしこまら居る霰のれ 史邦

椋櫛の系れ霞は狂ふありけ 野童

鶺鴒乃鴉らりこほす霰散のれ 不峰

呼ふと射賣つんえぬあられけ 凡兆

こころれ津さそりや朝飯のせぬぬ 畫好

こころちや内は居られ人へ傳 其角

初雪よ雪部屋のうく朝顔 史邦

そねやげのふん吹くやも雪まけ 羽紅

つらもろふ凡れ松のし野まらけ 探丸

下京ちちつむしとほ夜れる 凡兆

ちんくとい一物やちちの原 同

信濃路をさるる

ちちらちや植屋れ落の刈は 芭蕉

草之庵の留はれさるる

養老の公屋のあひと菴れを 尾張 其角

ちた目ハ竹の子筈うはさりたる 長崎 羽立

誰よりも健あつた 即七

いりてけりや 去来

青田追悼

乳のこみに世を海も歸去 尚白

うもむもえ也の慶をきれ内 芭蕉

餅と記懐ハ歌は似ぬとあつ 乙卯

一月のあよまらむ 文州

住吉奉納

夜神糸や鼻息白一面の内 其角

節季候よ又の心 伊賀 須球

あやうら 同 祐甫

乙卯、新巻

くの家を 芭蕉

弱法師 其角

歳之夜や曾祖文を寄げふと枕 長和
 うす望れしは初あやうしの音 去来
 らきては多岐まうけは伊勢の 同
 大とーやまはまを結ぶる人そら 羽紅
 やりてぬく又もまむくろ叢の層 其角
 い孫の心よふいさつ年れ暮 路通
 糸のく我破は襦袢幾とるり 松風

猿蓑集卷之二

夏

有明の面むすやにほくまは 其角
 夏にすこし暑さのり燕や時鳥 木市
 那をを様よるるにほくまは 芭蕉
 時鳥よりよめあつて時鳥の 尚白
 けりては何もなまぬく門接 凡兆
 りてはささのこころす時鳥 智月

蜀魂たぐやその角櫓 史邦

入おれしもの中やに 羽紅

ほろほろ涙ふりかきあつたれ 丈艸

ふたも代官あやほろほろ 去来

こい死を我塚てあけろよ 奥羽

松島一見の所もさうのうや
痛の毛衣とあつたれ

去鴻や去鴻よ身をまわれほろほろ 曾良

こい死をまはろろかろせよあんなも 芭蕉

旅館庭でさうく
色草をとんす

あつたあつたよあつたあつた
膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あつたあつたあつたあつた
其角

あつたあつたあつたあつた
全峯 江戸

別僧

あつたあつたあつたあつた
越人

あつたあつたあつたあつた
珠碩

翁は依せられてすまふ
しりて

似合しよけのこまはの里

亡人
杜國

あふさき白むけのま

嵐蘭

井れすきよしくし
杜の

半残

起せくゆまきねぬ
輕の回乃

起くのこころはつ

仙化

題去來之塔峨洛柿舎

長極る初の本魚屋を名延如
元兆

破垣やわし麻子れが道
曾良

南都旅店

誰のこころは乃園此相
千那

洗濯やもあまの
尾張
傳定

豊國よて

竹の子れ力を得る多りへき
元兆

多けれ子や白鳥
去來

たけのこや稚すめ
芭蕉

猪ノ吹入ともくともく 正秀

明石夜泊

時をやいふれよ等夜交月 芭蕉
君が杖が節摩奈を鍋一ツ 越人

五月三日

しつこくしつこく

石のまじりとまじくしける高蒲也 其角
粽はふかしくふくまむ額髪 芭蕉
隈藻の廣きふくむ餅粽 ^{江戸}岩翁

さびさび客人やともまらりけ 尚白

五月六日大坂より死の
遠志を吊ひて

大坂や刀のぬれぬ夏乃み十夜 蝉吟 ^{伴賀}

真茹言館にて

箕草や兵九うけ先乃跡 芭蕉
遠出よあひ屋の下に蟻の跡 同

け境をいひしるるありしついで
こころ事し書

かこつかり角かりまけは流石の石 同

五月あゝ家あり控てありし
元北

ひね妻れ味なきやわりぬ
末節

るとの謂はれありさつと雨
史邦

奥羽名取の郡よく申為る
の塚はいつくもよと存ちま
道より一里まゝありたり乃方
笠落しつちやよと存ちま
わつしきまゝ五りぬいと
あつくまゝのり

笠落やいつこみぬれぬり道
芭蕉

大和紀傳のさくいそとあり
て往來の形れをくしてま
すめり月ハ料(きつ)い
紙のくくた書つけり

すめり月ハ料(きつ)い
紙のくくた書つけり

つらりのくくありぬ
去來

髪利や一夜今情(サビ)みりぬ
元北

目の道や養能くさ月ありぬ
芭蕉

待地や若もせくもぬりぬ
羽紅

七十余の老醫みまくりり
斗子んころりてなくま
にいふの句をけるるれを醫
いまうりり一時のさよん
る人よあまわらば衣よの
知るいりりて若もぬ

けし年よとてとてとてとて
ゆりゆりゆりゆり

六月の力や五月あか 其角

百姓も妻よ取つく茶摘奇 去来

志くもや茶山よはまぬつれ 正秀

つみ合ふれけけや妻島 照所 游力

孫をと愛しく

妻を家しくやらん雨蛙 智月

妻出きて鯉道吟よ山や歌部 江戸 花紅

志く川の関を

月流のくもや奥け田抽く 芭蕉

出羽のくもと春と

眉掃を面影よしくお粉のま 同

法隆寺南帳
南無佛の名子を拜す

衣袴けくまなうくお粉のま 千那

回の取れまうらひ草くれ 伊賀 万守

膳所曲水之樓

螢火や吹とくはまきそし場のかき 去来

夢田乃螢火二句

闇の夜や子を泣かす螢火と螢火の 凡兆

けしきもや船歌酔ておのつれ 芭蕉

之熱野へ清きもの時

螢火やこゝろうろくま八思尾谷 田上尾

あれらよ糖と口りあふぬも物 尚白

草むしや百合の中こゝろの魚 半残

病後

空つらやわらふつらつら百合のふ 大塚 何処

すけりやあふりはるる百合のそら 乙扇

残蚊辞を作す

子やなごん其子の母を蚊の吟と 嵐園

饑別

ととすや蚊屋のうらふぬ瘰の骨 膳所 里東

うらふぬ瘰の骨
集書するは者よこれむしと

不^レレ^レ夜と昔の冠者よ名残哉 其角

清^{アキ}のや蚕の吐く糸乃^レ宛 文州

下^レ等^ノ地^ノ虫^ノた^レれ^レ蟬^ノの^レ聲 嵐雪

客^ノありや^レ指^ノを^レか^レけ^レる^レ鯨^ノの^レ聲 膳所 探志

秋^ノの^レぬ^レる^レま^レる^レす^レ鯨^ノの^レ聲 芭蕉

表^ノと^レや^レ音^ノ麻^ノ州^ノと^レあ^レの^レは^レ 俣市

渚^ノり^レ魚^ノと^レ澤^ノの^レ花^ノの^レう^レ流^ノ哉 元兆

舟^ノの^レ素^ノれ^レ唱^ノ奇^ノの^レ合^ノ歡^ノの^レ花^ノ 子那

白^ノ雨^ノや^レ鐘^ノの^レ音^ノも^レ日^ノれ^レ夕 史邦

素堂之蓮池邊

白^ノる^レや^レ蓮^ノ一^ノ枝^ノの^レ於^レり^レま 嵐蘭

日^ノ燒^レ田^ノや^レ鳴^レく^レつ^レく^レ鳴^レく^レ蛙 乙羽

日^ノ乃^レ田^ノ者^ノと^レ鹽^ノの^レ底^ノに^レ蟻^ノれ 元兆

水^ノを^レ月^ノの^レ鼻^ノつ^レま^レあ^レる^レ殺^ノき^ノを 同

日^ノの^レ曇^レや^レこ^レろ^レく^レ曇^レと^レ牛^ノけ^レ台 正秀

ま^レる^レ暑^ノり^レ籠^ノの^レ髪^ノの^レ房 木節

猿蓑集卷之三

妹

梅風や蓮花ちよよ花一

不知
讀人

此句東氏よりききし

素堂の

かひらりものけ初さ齒や秋の風 秋風

芭蕉屋より何よおれや妹の風 路通

人よ似て梅のまを細話のせ 珍碩

加賀乃全昌寺に宿す

ヨラスカラ

終夜枯れきくや

ウラ

曾良

笠原や踏鳥の寝ぬおをねの風

江戸 山川

あまのやめや鬱令留れ枯れぬ

九兆

く川露や枯れぬの起あらし

去来

大比叡やいぬぬおのたのしき

野童

と雲らりて踏ふかれぬや和の音

九兆

文月や六りもよりの夜よ似す

芭蕉

合歡の本丸をあらうよと合あけ

同

七夕やあまのいづはくろぬへし

杜若

こやらの伝はくろり相撲取

去来

朝のほろろ寝るあらしりし

風姿

雲やあまの邊にほろりし

及肩

笑のほろろよまは木槿の

嵐蘭

まはぬくけくまの木槿の

秋風

さかたのほろろぬく

千那

伊賀小舟

伊賀

膳所

しんしのねくぬのあまもや珠巖雨 史邦

そよよや藪の田より卯あじ 豊稔

枯草やよしのほろろくくくす 子尹

迷ひ子の親めくろや下すもあ 羽紅

ハズおりにあひして業 くの文あけの序あま

まきく楊乃せんけ落らぬ 允兆

ふらふらあせにふて 去来

あふふのまきくあせにふて 去来

草刈より秋の思ひより秋の末路 李由

平田

え禄二年公卿は伏せしきまて
とちのくくより三越後よりあり
り脚くくくよかの國よて
くかりゆりていせまてえ
あせにふて

いつくまたれ即も秋の末 曾良

桐のまにらくくあせの用 色蕉

百舌鳥あくや入るくく女松系 允兆

初層より終るれまらるも 落梧

立人

柴田より

病^{ビヤラガシ}属れは後さしよあて瘰癧^{レツ} 色蕉

海との舟を小海老よまの^ト 同

加賀のふきとらや又多田乃
神社の宝物とくくを
うきうき草乃乃よとく
錦のそれよきよとく
うきまのあより懐くよ

心えんやし甲のよれきあくす 色蕉

み采島や二多ふれ中の虫^{ムシ} 尚白

こゝちありや^コ 風琴

こゝちありや

葉月や名鶴よ^ハ 千子

こゝち月に^{ツキ} 之道

葉^ハ 半残

月えせん^{ツキ} 去来

公羽をそや

松^{マツ} 土^{ツチ} 伊賀

加茂よ詣志で涙のあはれ

あの人

あつたあつたあつたあつた

よんわり

月詠や拍手もろく膝の上 史邦

友近の六條よあつたあつた

伊賀

影やうたてておぼろ朝月夜 卓袋

しやんばあやあしうしう月の歌 乙羽

京筑紫をすれ月う宿中る 丈艸

あつたの相もやうよ月一う 凡兆

あつたあつたあつたあつたあつた 尚白

向の籠るあつたあつたあつた 曾良

え禄二年つらうあつたあつた

月をさうとあつたあつたあつた

月詠一あつたあつたあつたあつた 芭蕉

仲姪の望猶子を遠寄

うらな夜の月もあつたあつたあつた 去来

明月やあつたあつたあつたあつた 昌房

膳所

月^ハ入^ル道^ノ人^ノの^ハ破^レ云^フ云^フ 羽紅^ハ

僧^ノ正^ノの^ハ云^フよ^クの^ハ小^ノ屋^ノ此^ノを^ハあ^ハら^シ 尚白

和^ノ漸^ノや^ハ鳴^クつ^ノの^ハ浪^ノの^ハ絶^レ折^レ也^ハ 凡^レ兆

一^ノ戸^ノや^ハ衣^ノも^ハや^ハう^クこ^ノも^ハし^ク人^ノ 去^レ来

釋^ノの^ハ極^レ了^ル迹^ハ一^ノの^ハ云^フ云^フ 越^レ人

徒^ノ糟^ノや^ハか^クも^ハの^ハ食^ク子^ノ荒^ク留^ル 正^レ秀

あ^ハや^ハま^ハり^クも^ハこ^ノう^ノ地^ノの^ハ鐘^ノ也^ハ 嵐^ノ蘭

一鳥不鳴山更幽

物^ノの^ハ青^クら^シり^タら^シ葉^ノ山^ノ也^ハ 凡^レ兆

し^クも^ハ拍^ノの^ハ云^フ云^フ 曾^レ良

猿^ノ枕^ノ麻^ノの^ハつ^クも^ハ合^ク軒^ノ下^ノ 千^ノ里^ノ

鳩^ノや^ハ不^レ流^ク柿^ノ也^ハの^ハ齋^ノ麦^ノ白^ク 珠^ノ碩

と^ハち^ノや^ハ下^クる^クも^ハ下^ク條^ノの^ハ大^ク 凡^レ兆

鑿^ノ釣^ノひ^ノも^ハし^ク鐘^ノつ^クり 半^ノ殘

わ^ハあ^ハ間^ノの^ハ云^フ過^クり^タる^クも^ハ當^ク智^ク 尚^レ白

葉^ノを^ハ切^ク跡^ノま^ハり^タる^クも^ハ其^ノ角

七

七

言ふまゝに鶉の鳴き声もきこえられ 珠碩

この年の秋も松柳の秋 土芳

稲うら母よ出逢ぬくまの 凡兆

自題落柿舎

後めり竹をもちてあそぶ 去来

志し海やけつて橋のつれなき 塵生

肌をひ竹切のくすね葉 凡兆

神田みよ

とれいしうしらの指の音

神田の鼓の音 数足

指の音の音

さびしき大名のまじり 嵐雪

し秋の五日弱くすまが 丈艸

立する秋の夕や月がら 凡兆

世の中、鶴鶴の屋乃ら 同

培奥れ齒よこすや 荷分

三

三

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人か怒る悔もあはり

雨露沾

上臈の山莊より

候し

梅も春や山路梅入る

去来

しる香や入累半の角

加賀

句空

庭真

梅も春や山路梅入る

土芳

よき〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜

夢さして又一句のやまほしめ 嵐蘭
百八の〜〜〜〜〜 其角
ひらひらの寝の能宿ら〜おき日 去来
野田の序の〜〜〜〜〜 史邦
〜〜〜〜〜 嵐蘭
〜〜〜〜〜 如行

憶翁之客中

裾の〜〜〜〜〜 嵐雪
〜〜〜〜〜 路通
七種や跡〜〜〜〜〜 其角
家や〜〜〜〜〜 丈艸
〜〜〜〜〜 其角
脈〜〜〜〜〜 同
鐘〜〜〜〜〜 去来
鶯の香踏〜〜〜〜〜 一桐

伊賀

雪やしら座一みりれ志しりふ 江戸 溪石

うらやふやを詠めしれし 其角

鶯や下駄の齒よりく小田代上 凡兆

雪や窓よ文をよむしんあし 伊賀 魚日

やめの雪柳をらふす 江戸 探丸

けし溜みきよめ持へき柳 ト宅

垣 同 遠水

し 同 尚白

青柳の志しれや鯉の住所 伊賀 一啖

雪やけや鈴いす 同 木白

待中乃正目よ 揚水

回 同

雪や 色蕉

雪や 越人

雪 去来

雪路 余寒の當座

104

105

来るよめさのさしめ羽織カ 龜翁

おのまねちりしむるし目カ 尚白

出らりや極よあまれさるめカ 龜翁

をさすやゆさるよ物あはれカ 嵐雪

骨紫のやれさるよまの芽りれカ 凡兆

白奥や海苔ハト熟のふ合せカ 其角

くのらよさるよさるよ松峯尾張

まきよたしきやしりしカ 元志

陽炎や取つさるよさるよ上カ 荷分

あけはぬやなほぬあカ 百歳

うけりよさるよさるよ岸のあカ 土左方

さゆぬのさあさるよ虚よさカ 氷同

野イトユラフさるよさるよさるよカ 凡兆

さるよぬや柴胡の糸のさるよカ 色蕉

いとゆぬよ白川のさるよカ 伊賀 配力

狗脊ゼンマイの塵よさるよカ 嵐雪

彼岸の人とむすの一夜におも
路通

よのしやちりたるくは涅槃像
野水

花並ぬ裏ハ燃乃かゝるい道
九兆

伊賀

まことく今や紀のへいあ房
沢雉

春もぬや屏風のふ草ふ花咲ぬ
嵐虎

ふるふよみして

まをるやふりゆるるまは門
猿錐

不性と金かき起るれ春あぬ
色蕉

春もぬや田舎のふれ鈴賣
史邦

ふるふるあふもや軒まの在
羽紅

泥もぬや田舎水の壁つらん
史邦

蜂こもるも春の竹や虫の糞
昌房

振るもや下座をよむるまは雛
去来

伊賀

まをるもいすれ雛のつる雛のふ
萩子

桃柳くらりありとやまんなれ子
羽紅

三河

まをるもまは境まのつる雛のふ
鳥巢

里人の暗居しつゝ田畑られ 嵐推

蝶のまじりて一夜寝よらり有夢のほ 半残

糸を切て白根の霧をのまゆ 桃妖

いつのほろりこころすもや 療園風

目の影やこころれよの親すめ 珠碩

花の露ぬむるのすもや縁の先 土芳

闇の底や果なまよりつゝあけ 芭蕉

越より飛来しけしとて露の
つゝのちかきまじりて道

あはれはあはれ

鶯の巢の樟の枯枝よ目に入ぬ 允兆

うさぎのうらみんをよめ 石口

子や待ん餘りきまぬのきあり 秋風

いづらあけ申れ拍子や雉もあや 芭蕉

芭蕉菴のあはれを詠

蓮草小鋸はしあはれ 曲水

木尻筋旅しつゝあはれ 山店

畫讚

山吹や夕日の焙炉ホイロは白く時

芭蕉

白玉ハクジヨクはあまたつく梅ウメの肌

車来

わらわらわらわらわらわら
あちそれの髪けりうらなもあ
らうととけまを

竹タケのうらとまきやちり梅

羽紅

鴨カモ半ハちりよヨはさくしき部

坂上氏

津國山本

うらとまきの梅ウメはうらとま梅ウメ

芭蕉

うらとまきの梅ウメはうらとま梅ウメ

伊賀 利男

東叡トウエイはあまた梅

小坊コボウはあまた梅ウメはうらとま梅ウメ

其角

一枝ヒトエはあまた梅ウメはうらとま梅ウメ

尚白

雞トリのあまた梅ウメはうらとま梅ウメ

凡兆

まきとまき梅ウメはうらとま梅ウメ

丈艸

馬ウマのあまた梅ウメはうらとま梅ウメ

史邦

中ナカのあまた梅ウメはうらとま梅ウメ

千那

葛城のゆきをふり

粧ふるしあはぬけり神の顔
色蕉

いこの園花垣のなはらのつら
ふらぬ乃ハ定橋の軒よ附
らまきと云傳へんらん道
我し

一軍ハこれ死するのち縁う下
同

三文の墓土東武谷中にもう
と歳して死れれ年のはら
城よりしめ墓のまは橋柱
けりうーかみく母れおこ
つててうれ橋をたつて後
他の墓様とてうれつる

まうやうの吸ふ野の往還リ
園風

知人よあはれしとありん
去来

ある僧の燈りしあのかれ
凡北

浪人のやうに

嵐を帯の夜あれう花靨
半残

睨きしれつれし結ゆへ
長眉

これの奥も
うのうは

大寺やうに奥乃あのみ
曾良

道灌山よのけしき

る澹やまゝのけをわらふ 嵐蘭

源氏の強きとく

探子に夜らるまれまじし 羽紅ウコウ女メ

庚午の歳家と結と

綾よりりしきまゝ花はらりし 北枝カキ

しりらるや伽藍の樞クワや 凡ワザ花ハナ

海棠トウヤクはしと満ミり夜ヨの月ツキ 普フ船ネ

大和の脚乃タカ

草郎クサロウとやるはれぬのま 芭蕉

しるや躑躅シツシュクふけは尾ビのひ 探丸

やうと海ウミまゝるや夕ユフ日ヒ 智月

兔角ウサカして卯ウまつちし 山川ヤマカハシ

鷗ウ鳥トリのふしうらまゝと 式シキ之ノ

木曾塚

其ソノまの石イシのなほはまされ 乙ニ羽ハ

二〇七

二〇七

春風夜をよめる初殿の堂を籠 曾良

望湖水惜春

けしきをよめる初殿の堂を籠 芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

鶯の羽を刷ぬまろしと我 カイツツク

一ぬきし羽をよめる初殿の堂を籠 芭蕉

股引の朝をよめる初殿の堂を籠 允兆

たぬきし羽をよめる初殿の堂を籠 史邦

まろしと我をよめる初殿の堂を籠 蕉

人よめられし名物乃梨 来

瘦骨代すこ起函の力なき
 陸をさうりて車引こむ
 うきくを枳殻垣より懸ん
 いさや別め力さー出す
 せうけよ掃てうらまを信
 地まひ切さる飛うひるよ
 青天よ有明月の影ちけ
 湖水の枯乃比良たらる我
 蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

紫のや蒼妻めすまけ歌をよ
 ぬのこ若智ぬ月影夕らま
 押合て寝くハ又きつらわ
 よられ中乃まゝの赤き
 一搦^{ツカイ}鞆つくる窓のしれ
 枇杷の古名やにまきり
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来九

芭蕉 九
元兆 九
史邦 九

元兆

市中ハ物のよほら也及此月
あししくとんく乃勢 芭蕉
二番草一取の果は種よき 去来
原くらくくくあ一投 兆
けし助ハ銀のえきす不自由は 蕉
たききくく長き松指 来

草村は蛙こはるのまうこ道
落乃せきさちにはけいゆす
道心のむらあはあれつるむ時
能やせ七尾の冬は行うを
魚の骨志りある處の老をそ
待人へへ小片のの鑑
まより屏風を倒す女子
湯後六竹の筆子儂し

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

苗香はまをと吸落すの嵐
儂やとしく寺りく入る
まの引の格とせをゆる様め
名 年へに一年の地子もや
五六七はまつらふの家儲ミツタリ
足袋少くもは里行ふの石
追よそ早よ去る乃刀持
了所らそ何よ水はほり

蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉 兆

ま

三

戸障子もむらさきの雲紋 蕉

らんトヲガラシもつむらいつくさつく 来

ころくも草鞋をひく月影に 蕉

蚤をよこしよ起し一雨秋 来

そのまゝのころくもあつる林蔭 蕉

ゆらぐ蓋のあつる半纏 来

草履は折目くはたるおやあ 蕉

いのら娘も撰集れまゝ 来

^ウさまよふ品うつらゝる意よりて 蕉

はせの果も皆小町ちり 来

あにたう粥もあつる海へ 来

はらぬらとちりもあつる極楽 蕉

まじりく風はすもあつる 蕉

お茶もあつるあつるの森に 来

元兆 十二

巻

芭蕉 十二

去来 十二

九

凡兆

灰汁桶のきやまらりきり

あゆむのすりてき自寝す。秋 芭蕉

朝暮おあつたる月うけよ 野水

あゝて嬉しく十乃とらき 去来

子代孫へき物を極く子月へ 蕉

雪の青にたらしき雪 兆

巻

六

すまはもき女れぢぢ魚もいふ
何れりしるる糧乃ちあ
夕月夜星の音ははは
人もちあはるるあ
うそつは自慢いふ
又もあはるるあ
ほらり田の音や
かきあはるるあ

来 水 兆 来 水 兆 来

抱りた尻ぢぢぢ
雨のやりた
昼は
あはるる
系橋
あはるる

来 水 兆 来 水 兆 来

九兆 九

九兆

九

芭蕉 九
野水 九
去来 九

餞乙卯東武行

芭蕉

梅の影まよりとけ春のさうけ
 かさあつりこそ春の暖か 乙卯
 五云雀あゝお田よ土持はるれ 珍碩
 志ともねよてふよれよと糸 素男
 乃隅よ虫齒うそそて居る月 乃初
 二階の窓よぞねよとあさ 蕉

放やううつた跡かゝるもす
 編の急延乃力ちきうせ
 むつしんれ初よにけり鏡屏と
 内藤頭よと呼みろふれ
 卯の別乃箕よに並ぬやめ方
 よとまきるねの志のうかり
 萩のれよとよのれよとよて
 若くしよる百舌るの二勢
 男 碩 品 蕉 碩 男 智月

懐よるよを正あやむる様の月
 けささささぬあつら
 鏡の柄よさすらりよるふのれ
 灰まきさしすかりあ跡
 名 喜れ目よはま舞てくる孫机
 店屋ゆくよ休のまうかり
 汗ぬるよの端のまの糸
 さらせりよる雛乃下
 凡兆 去来 兆 正秀 来 半残 土芳

十
 十一

大膽よゆきしむるおぼろしき
 身われ狭の取所なき
 小刀乃鈴又下る細工も
 棚よ火とりす大年の夜
 うらまゝにねも後も後の
 むのぢ合せざるおこめ
 此よのれめさるる破る解
 碧油移させく志く月記
 残 号 園風 猿 残 風 雖

咳の隣いらくも縁つら
 流ハくよほもさくらんを顔
 新やのき強をさおらひる金は益
 うすもある糸の割下結
 花よとくつれもさるる
 雛の被る色深るる
 芳 風 嵐 蘭 史 邦 野 水 羽 紅

芭蕉 三

乙羽	五	土芳	三
珠碩	三	園風	三
素男	三	猿錐	二
智月	一	嵐蘭	一
凡兆	二	史邦	一
去來	二	野水	一
正秀	一	羽紅	一
半殘	四		

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥岩向のうらまよふ
 國分山と云うれを國分寺の名を
 傳よ下るへ一掃廓は細き流を渡
 りて翠巖山ノ下よ及る中三曲二百步
 行々八幡宮多むたふ神体
 ハ跡隠乃る像もや唯一の家よ

く心す先ある可き谷の清水を
汲み自ら飲みし頃の事な備へ
一好の備へしりし昔侍せんか
所よんらしり侍あり侍りてもくみ
る物しりしり侍佛一間を隔て夜
の物なむしり侍あり侍りてもく
つりて侍あり侍り侍り侍り侍り
かそびの甲斐なり侍り侍り侍り

洛よのほりし侍り侍り侍り侍り侍り
し額も侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
草菴の記念なり侍り侍り侍り侍り
し旅の後と云ふ侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り
侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り侍り

里の竹のこた入しきりていの志乃稻
ういあーと兔の巨細よりよあや
歌ゆさるぬ農談目厭ステミよ山の端よ
うもさる他屋サ静よ月を結てい
新を付ら蛇ヒをとりて園カゲボシ雨よ是モチヨクヨク水
をうさすいこいこいさるぬよ
深寂シビシを好こし野よ跡をかくと舞
とよあさるや病あ人よ供てを

をいしり人よ似より借ツクシ年月此
移り独り身れ料をよものよ
あはれは官念命れ地をさる
やいしり佛離祖室のトボツ扉よ入
ら舞をさるもあさるたよはるき
よあをせめ花鳥ナリキヨフ情シヤフを芳しと
暫く生涯のさるわ事とせいあれと
路よす独あさるしとけ一筋よつみ

古松鬱兮綠陰清
 茅屋竹椽總數間
 內有佳人獨養生
 滿口錦繡輝山川
 風景依稀入誚城
 此地自古富勝覽
 今日因君尚益榮

俳句

元禄庚午仲殊日
 震軒具州

去冬ノ見

儿右日記

時を北月中へてやる林屏の曲水
 とのうたれ跡をたつやまの野水
 鶏ももろく時を鳥籠に去来
 海へは五月雨のぬやうに凡兆
 軒ちりき名梨のほの後の千那
 細脰のやまのやまのよのよの珠碩

贈紙帳

おもしろい紙地よりなるものあり 野徑

いかにして露の露よりなるものあり 里東

雲を飛ぶものなるものあり 乙羽

顔や津乃中れ花よりなるものあり 膳所 怒誰

多きし一帯よりなるものあり 探志

五羽六羽菴よりなるものあり 元志

木ついでたわしなるものあり 膳所 泥土

笠あふり櫃よりなるものあり 史邦

月結や海を鹿目よりなるものあり 正秀

志つらさの雲の雲洗し法あり 立人 柳陰

涼よるものなるものあり 如行

訪よ留らるるあり

椎のよるものなるものあり 膳所 朴水

目下やるものなるものあり 美濃 市隠

文よるものあり

撰所来や早苗のふりよるものあり 半残

麦乃粒をよき産す

一袋にこれや鳥羽田のこころ 麦 之道

書音

長崎

一隻入るるさくらや 魯町

夕立や梅木の奥に 及肩

昇袿揺掛

梅のや田と山に 尚白

贈箋

志々心のみさあしみのし 北枝

よ履かゝ侍ふりきり 木節

包紙の書

膳所

縁よすす茶袋や 扇

縮のふくれを 智月

石山やけりて果下 羽紅

桶の梅やまねて 昌房

里ハハクヤとさあつ 何処

啼やいづ境よはりのしるも 越人

越人向く訪合て

筆の交れ借よ飛入菴のれ 等哉

明年弥生尋旧菴

春のぬやよりの星より戸たひつ 嵐蘭

同契

涼しきり居をよへ住持し 曾良

猿
故事

跋

猿蓑者色蕉翁滑髻之首韻也

非比彼山寺偷衣朝市頂冠笑

只任心感物写興而已矣洛下

逸人凡兆去来随翁遊学棋館

竹窓躡等凌節斯有歲屬撰此

集玩弄無已自謂絶超狐腋白

裘者也於是四方嗟友幢々往

來或千里寄書々中首有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集錄者索居竄栖為難
通信且有旒倪婦人不琢磨者
廉言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維旼元祿四稔辛未仲夏余掛

果
ハクシテハ
生不エテ

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席
見需記此支題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾一蕞高張有補干詞
海漢人云

夙狂野衲

丈艸漢書

正竹書之

京寺町二条上ル

井筒屋庄若衛板



